

詩篇41篇 「病に心を配る人」

1A 幸いな人 1-3

2A 罪という現実 4

3A 人の様相 5-9

4A 主への信頼 10-13

本文

詩篇第41篇を開いてください。私たちは聖書通読の学びで詩篇を読んでいます、今日で詩篇の第一巻を終えることとなります。午後礼拝で38篇から41篇までを学びたいと思っていますが、今朝は41篇に注目したいと思います。38篇から41篇までには、病気、しかも死に至るかもしれない病に罹ったダビデの嘆く声を読むことができます。これまでもダビデが神に対して嘆く祈りを捧げてきましたが、最後の四つの詩篇は、病という苦しみの中で話しています。

私たちの中で、病を通して信仰を持ったという方はどれだけおられるでしょうか？あるいは、病の人を通して、信仰に導かれたという方はどうでしょうか？私は、これに当てはまると思います。初めのきっかけは、三浦綾子さんの自伝小説「道ありき」でした。彼女は、戦後学校の教職を辞めてから間もなくして結核に罹りました。それから信仰を持っています。その後、脊椎カリエス、心臓発作、带状疱疹、直腸癌、パーキンソン病など度重なる病魔と闘いながら、なんと77歳まで生き、天に召されています。

病によって信仰に至り、かえって幸せを得た人は数多くいますね。戦前であれば、賀川豊彦は「死線を越えて」という自伝小説を書いており、彼も数多くの病と闘いながら伝道や貧困救済のための勢力的な働きを行いました。水野源三さんもいます。彼は9歳の時に赤痢にかかって、脳膜炎を併発して体の自由を奪われました。唇さえも動かなくなり、目の瞬きしかできなかったのですが、その瞬きによって数多くの詩を残しています。それらの詩には、人を動かす喜びと希望に満ちたものであります。星野富弘さんもそうですし、彼は口にくわえた筆で絵を描き、詩を書いています。

これらの人々が書き残したものは、病に罹っても辛うじて絶望せずに済んだ、というような気休めではありません。むしろ健常者よりもはるかにすぐれた、確信に満ちた言葉を語っておられます。病というものの中に神の大きな御心があるということが分かります。なぜなら、私たちの主イエスご自身が、「病の人」と呼ばれているからです。「彼はさげすまれ、人々からのけものにされ、悲しみの人で病を知っていた。(イザヤ 53:3)」主は、鞭打ちによる打ち傷と十字架で手足に釘を刺されることによって、悲しみの人で病を知る方となりました。それゆえ、病の中にいる人々がイエス様に出会うということが、しばしばあるのです。

1A 幸いな人 1-3

41 指揮者のために。ダビデの賛歌 41:1 幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。主はわざわいの日にその人を助け出される。41:2 主は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を敵の意のままにさせないでください。41:3 主は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやしてくださるように。

ダビデは、これまでも「幸いなことよ」と、いろいろな人をそう呼んできました。主の教えを口ずさむ人は幸いであると、そして背きの罪が赦された人は幸いであると言っていますが、ここでは、「弱っている者に心を配る人」が幸いであると言います。それは、もっと全般的に自分自身も病に罹ることもあれば、病に罹っている人々に寄り添うこともあれば、病に罹ることに関心を寄せることもあられるでしょう。病に罹っていることに何らかの形で関わっている人は、幸いであると言うのです。

もちろん、病に罹れば初めに、喪失感に襲われます。これまで健常であったからこそ行なうことができたものが、できなくなるのですから、自分の支えにしてきたものが失われてしまいます。自分の仕事ができなくなり、そこでの立場も失います。そして、いつの間にか人との関わりもなくなって、自分が忘れられてしまうという恐れも出てくるでしょう。

しかし、その先に「主はわざわいの日にその人を助け出される。」とあります。病を知ることによって、実は自分が失っていたものを取り戻すのです。それは、自分が神によって生かされていることを初めとし、人との関わりによって支えられていることを知ります。一言で言えば慰めを知ることができます。「もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。(2コリント 1:6)」もし自分が病に関わらなかつたら、病の人の苦しみを知ることはありません。病や弱さを持っているからこそ、他の病や弱さを持っている人々を慰めることができるのです。

痛みに対する憐れみというのは、その痛みを共有することによってのみ抱くことができるものだからです。イエス様ご自身が、痛みを担って下さいました。病の人となって下さいました。ですから、イエス様は慰めを持つことができます。そしてそのイエス様の慰めによって、他に苦しみを抱えている人々を慰めることができるようになります。

私は興味深い形で、あるクリスチャンの痛みをほんの少し知ることができます。年に一回、あるところで、聖書セミナーで教えさせていただいているのですが、すぐそばに住んでいたのに、その知人のクリスチャンは、敢えてそこに参加しなかったのです。なぜならば、私たちがそこのお宅に泊まり、そしてセミナーで聖書を教え、そのすぐ後にご子息が自殺を図ったからです。ですから、毎年同じような時期にセミナーがあるので、その痛みが思い出されるので参加されていないと伺ったことがあります。別に仲が悪くなった訳でも何でもないので、しかし私は、その方の顔を拝見でき

ないというところで、私はなおのこと幸いでした。なぜなら、その痛みを私も思い起こすことができるからです。もし他の日であれば、私はその方のことを思いやることはなかったことでしょう。

皆さんが病をもっておられたら、それは私や他の兄弟姉妹では決してすることのできない、すばらしい主にある働きを持っておられるということです。それは憐れみを示すという働きです。これこそ、クリスチャンのすべき大きな務めの一つであります。病があるということだけでその働きの幅が大きく広がります。

2A 罪という現実 4

ですから、病にいるということは、第一に、神の慰めを受け、そして他の人の弱さを共有して、慰めを与える働きをすることができるという点があります。第二点目を見てみましょう。

41:4 私は言った。「主よ、あわれんでください。私のたましいをいやしてください。私はあなたに罪を犯したからです。」

ダビデは、自分自身が病の中にいますが、それが何らかの形で自分の犯した罪と関わっていることを告白しています。病については、第二に「罪があるという現実を知ることができる。」ということです。病は、三つの形で人に罪を思い起こさせます。一つは、自分の犯した罪です。これは直接的に自分の行なった罪によって、病に罹ったという場合です。イエス様は、連れて来られた中風の男に対して、「子よ。あなたの罪は赦されました。」と言われました(マルコ 2:5)。性的罪を犯したのでしょうか、それに起因して中風に罹ったと考えられます。旧約時代には、モーセの姉ミリヤムが、モーセを中傷する罪を犯したのでらい病に罹りました。

二つ目に、罪を思い起こさせる病とは、直接的な原因ではないけれども、その病によって自分が神に立ち向かえていなかった部分、悔い改めなければいけなかった部分が示されることがあります。神が、病の中で、その痛みによって大きな声を挙げてくださる、注意喚起をしてくださるということがあります。CS.ルイスによる有名な言葉を引用します。「神はわれわれの楽しみの中でささやかれ、われわれの良心に語られる。しかし、われわれの痛みの中で叫ばれる。痛みは耳が不自由な世界の人々を覚醒させるメガホン(拡声器)である。」

三つ目、病と罪の関わりは、この世界に罪が入り込んだという現実を教えてください。自分の罪とも関わりがないし、また神の教育的配慮とも関わりがないし、潔癖な人であっても病に罹ります。しかし、その潔癖な人であっても、病を通してこの世界が贖われなければいけないところなのだと思えることができます。最初の人アダムが罪を犯したことにより、死が入りました。病の行きつくところは死であり、病に罹ることによって、自分の体も、またこの世界もキリストによる贖いが必要であることを教えてください。ヨブは潔癖な人でした。彼は、重い皮膚病に罹りました。なぜそのような痛みを負わなければいけないのか分からずに悶え苦しんでいましたが、彼の口から咄嗟に次の

声が出たのです。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。(19:25-26)」

ですから私たちは、病が癒しのため、罪の赦しのために祈るとよいです。確かに、病が完全に癒されるのはイエス様が再臨によってこの体を変えてくださり、また世界も変えられる時に与えられます。けれども、御霊をいただいている私たちは、神の国の訪れの一部を味わうことができます。体の病の癒しと共に、罪の赦しのための告白も同じ時間に持つとよいです。そうすると、魂だけでなく心身の癒しも与えられます。「信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。(ヤコブ 5:15-16)」

3A 人の様相 5-9

こうして、病にある第二の点を見ました。罪の赦しに関わることであることが分かりました。第三に、「人々について、その心の様相を見ることになる。」という点を見たいと思います。

41:5 私の敵は、私の悪口を言います。「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」41:6 たとい、人が見舞いに来て、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふらす。41:7 私を憎む者はみな、私について共にささやき、私に対して、悪をたくらむ。41:8 「邪悪なものが、彼に取りついている。彼が床に着いたからには、もう二度と起き上がれまい。」41:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。

ダビデが病に罹って、周囲の人々の態度が変わります。これまで忠実に彼に従っていたはずなのですが、彼が病になったことで、本当は愛をもって、まごころから従っていなかったことが露わにされます。いつ彼が死んでくれるのか、ということをお願いしています。そして、見舞いには来るのですが、それは偽りであり、外に出ていけば思いやりも微塵もない発言をします。あるいは、心ない判断をします。8 節の「邪悪なもの」とはペリヤアルというヘブル語で、悪霊とも訳すことのできるものです。病や災いに遭うと、必ずと言って良いほど、悪魔や悪霊がそれを行っているのだという人が出てきます。あるいは神からの呪いであるという人がいます。親しい友も自分を裏切るのです。

私の友人で、クリスチャンになる証しを聞きました。彼は若い時に米軍の兵士でしたが、いつもお酒を飲んで悪ふざけをする仲間がいました。けれども、怪我が病気で入院しました。その時に、見舞いに来る人がほとんどいなかったということです。そこで友情がそのようなものだったというのが分かったのです。「箴言 17:17 友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」とあるとおりです。

友であるはずの私たちキリスト者が、果たして病の時、また苦境の時に共にいるでしょうか？ 迫

害されているピリピの教会の人々のことを心配しているのは、テモテだけだとパウロは言いました。「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを認めてはいません。(ピリピ 2:20-21)」そうです、人々がどれだけ苦しみの中で気にかけて行動に移しているかによって、本人たちがイエス・キリストをどれだけ求めているかが明らかにされます。パウロが二度目に牢獄に入った時は、彼についている人はほとんどいなかったという、厳しい現実がありました。パウロがこう言っています。「デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまい、(2テモテ 4:10)」デマスは初めパウロといっしょにいた働き手であったのに、次第に今の世を愛してしまっただけです。

4A 主への信頼 10-13

そして、病によって知ることのできる第四の点は、これが最も大切ですが、「主に信頼できるようになる。」ということです。

41:10 しかし、主よ。あなたは私をあわれんでください。私を立ち上がらせてください。そうすれば私は、彼らに仕返しができます。41:11 このことによって、あなたは私を喜んでおられるのが、わかります。私の敵が私に勝ちどきをあげないからです。41:12 誠実を尽くしている私を強くささえ、いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。41:13 ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。

ダビデは、主に憐れんでくださいと叫んでいます。そして自分を強く支えてくださいと願っています。それから、御前に立たせてくださいと祈っています。それで、その祈りが賛美へと昇華されています。「ほむべきかな。イスラエルの神、主。」と言っています。病によって、悲しみを知ることによって、自分の命について何が最も大切なのかを悟るようになります。神の憐れみがなければ、生きられない存在なのだということを知るようになります。

パウロは、数多くの人を御霊によって癒しました。けれども、彼自身の肉体にある病には癒しは与えられませんでした。「また、その啓示があまりにも素晴らしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。(2コリント 12:7-10)」

この「肉体の棘」が何を指しているのかは、いろいろな意見があります。主要なのは彼が、目が

よく見えなくなったのではないかというものです。なぜなら、ガラテヤにいる人々は、彼に自分の目を抉り出してあげようということまで考えたほど、パウロを愛し、慕っていました。目であっても、他の病気であっても、ここでパウロは、初めは取り去ってくださるようお願いしました。けれども、主は取り去らないでかえって、「わたしの恵みは、あなたに十分であるからである。」と言われたのです。つまり、神の恵みをパウロはこの病によって知りました。キリストの力をこの病を通して知りました。だから、弱い時にこそ強いと大胆に告白できたのです。

先ほど紹介した、病の中で信仰をもった人々の言葉が、いかに輝いているかを話しました。目しか動かせなくなった水野源三さんの詩を紹介しましょう。彼にとっての詩は、神への賛美そのものでした。

<悲しみよ>

悲しみよ悲しみよ 本当にありがとう O Sorrow! Thank you so much,
お前が来なかったら つよくなかったなら O Sorrow! Had you not come to me, had you not been so strong,
私は今どうなったか I wonder how I would be today.
悲しみよ悲しみよ お前が私を O sorrow! You took me to the side of Jesus my Lord,
この世にはない大きな喜びが where there are joys not of this world,
かわらない平安がある 主イエス様の where there is peace not to be taken away,
みもとにつれて来てくれたのだ O Sorrow!

<苦しみなかつたら> (新聖歌 292 番の歌詞)

もしも私が苦しまなかつたら
神の愛を知らなかつたら
もしもおおくの兄弟姉妹が苦しまなかつたら
神様の愛は伝えられなかつたら
もしも主なるイエス様が苦しまなかつたら
神様の愛はあらわれなかつたら

私たちはもちろん、病が癒されたらそれはすばらしいことであり、癒されるように祈るべきであり、神の御業がそこで現われます。そして、この世において人々の称賛になるようなことであっても、そこで活躍して、神に栄光を帰することができます。例えば、スポーツ選手ですばらしい成績を出した人がただ神にだけ栄光を帰しています。それらも神の力の現われであることは確かなのですが、むしろその栄光は、十字架に付けられたキリストにある神の栄光に裏打ちされていなければいけないのです。病んでいる時にこそ見える自分の姿、キリストの力、神の恵みを知っている人こそ、世のはかなさや虚しさ、人々の心のうつろいに左右されることのない真価の試された信仰を持つことができます。